有島武郎の創作方法（下）

――『石にひしがれた雑草』から『或る女』へ――

内田　満

3　文学的複眼の解体

――『石にひしがれた雑草』

『迷路』全編を書き上げた直後、有島は『岩野泡鳴氏に』という一文を草して「国民新聞」に送った。彼はその中で、人間の向上を志向する欲求を強調して次のように書いている。

〈……現在の如き人類進化の程度、制度、状態では、人間がどれ程緊張し燃焼して生活しても満足を得られないのは自明の事です。現状を緊張して生活すると同時に、それを突破して、更に一歩を進めたいといふのは人間に抜くべからざる欲求です。[1]〉

ここで彼は、人間は社会制度とモラルにがんじがらめにされているけれどもそれをうち破って新しい制度とモラルを創造する力を持っている、それは〈自由自在な、万人に共通な、根柢的な力〉であって、自分はそれを〈愛〉と名付ける、〈而して愛が芸術を生む〉のだ、と書いている。これは『四つの事』の第三にあげていた、〈私は又愛したいが故に創作します。私の愛は墻の彼方に隠見する生活や自然やを如実に摑みたい衝動に駆られます。[2]〉という創作動機についての考察とも符合している。

現状に満足することのできない一個の主体が、彼をとりまく〈墻〉のむこうに突き進もうとする衝動にかられ、身を破ってそれをまっとうしようと体当たりしていく姿は有島を惹きつけて離さぬモチーフであった。『宣言』のY子はそのようにしてA・Bとの間に新しい関係を作りあげたし、『迷路』のAは信仰という〈墻〉をこえて人生の迷路に歩み出たのであった。しかし、〈墻の彼方〉にあるものは、それをあこがれる主体にとってつねに未知の世界であり、〈墻〉をこえた結果は未然に予測できない。その衝動は、ゆがめら

れた社会制度やモラルと対立し、それをうち破るものではありえても、それがただちに新しい制度やモラルを作り出す創造力たりうるかどうかは未知数である。虚偽をあばくことは、真実の復権への必要な手だての一つであるが、両者を同値等価と思いなすのは根のないロマンチシズムであろう。このとき有島は〈緊張し燃焼し〉つつ、錯誤のうちに一つの頂をきわめようとしていたのではなかったろうか。

『岩野泡鳴氏に』を書いて四日後、彼は中村白葉から次のような復讐譚を聞いたという。〈一人の男がいてある女と婚約していた。所がその男が洋行中、女は他の男と恋に陥った。最初の男が洋行から帰ると、女は凡てを白状した。男は慇懃にそれを許して結婚した。而して心に不断の嫉妬を秘めながら女にその親切の限りを尽した。女は肺病になった。而して死んだ。[3]〉――一人の男・ある女・他の男という三人のからみ合いは、『宣言』の人物配置A・Y子・Bの関係を想起させる。相違点は、はじめの男が女の心変わりを許してあくまで結婚したこと、女は白状したけれども他の男への愛を貫こうとする自己主張はしなかったこと、そして全体のモチーフが『宣言』の場合は真実の開示に向かってのぼりつめてゆく過程であったのに対し、こんどは真相のあからさまになったところから始まる復讐が中心になることなどである。『石にひしがれた雑草』は、この復讐譚によって構想された。有島は、刊行の際の広告文にこう書いている。

〈前者（注・『石にひしがれた雑草』）はその題材を他人の噂話から得た。私はその話を聞かされた時からその主人公に対して深く考へさせられた。而して「宣言」を書いた時の心持をもう一度裏返して自分に迫らなければならない必要を感じた。愛が正当に取扱はれた場合と不正当に取扱はれた場合とから来る恐ろしい隔たりを見窮めて見ようとした。[4]〉

この一文から、作者自身もこの復讐譚を『宣言』の世界を〈裏返し〉たもの、いわば対偶関係をなすものとしてうけとめたことがわかるが、そこから彼が〈「宣言」を書いた時の心持をもう一度裏返して自分に迫らなければならない必要を感じ〉たという創作衝動の振幅はきわめて興味ぶかい。復讐を主題とした一つのうわさ話が、彼にとっては痛切な否定的契機となったのである。

新しい年（大正7年）を迎えた有島は、その日記に、前年には雑誌にわずかな作品を発表しただけで作家としての名が確立されたことを恥じると書き、つづけて〈今年は「白樺」だけに発表する事に決心した。[5]〉と書いている。「白樺」だけに発表するという決心は、「新小説」7月号の『カインの末裔』・「中央公論」11月号の『迷路』その他によってにわかに出版界にもてはやされるようになったこと

をいさぎよしとせず、創作活動の揺籃であった「白樺」だけを発表の舞台にして創作の初心にかえりたいという願望から出たものであろうが、一つには「白樺」誌上で中断していた『或る女のグリンプス』を書きついで完成したいという具体的な目標を掲げたことでもあった。1月4日には足助素一にあてて〈今年は一つ白樺で「或る女」の続篇を完成してしまはうと思ってゐる〉[6]と書き送っている。

ここでわたくしは、それが中村白葉から『宣言』の内容を〈裏返し〉にしたような実話を聞いた直後にあたる点に注目したい。おそらくそれは、後に述べるように、彼が『或る女』の執筆を構想しはじめたところへ白葉の話を聞いたのでいっそう深い感興をおぼえることになった、という順序であったろう。そしてこの、ひとりの人間がゆがめられた愛のために身を滅していくという悲劇の経過と結末は、『石にひしがれた雑草』の構図となったばかりでなく、彼にとって『或る女のグリンプス』から『或る女』に通じるほの暗い小径をかいま見る思いを抱かせられるものだったのではなかろうか。それは、いわば向光性にのみ導かれていた田鶴子の光彩の影にくらんでいた登場人物（田鶴子も含めて）の諸相や、さまざまな関係をあらためてとらえなおしていく契機の一つともなったと考えられるのである。

ここにもう一つ、『生まれ出づる悩み』の讃歌がわき起こる。

〈北海道の木田から（画かきになりたいといふ漁夫）実におもしろい手紙が来た。前からあれを題材にして書きたいと思ってゐた所だから一つものにしようと思つてゐる。[7]〉

こうして、死に至る病とも言うべき復讐譚は、生まれ出ようとする悩みという対立的なモチーフと対置されることになった。その結果、作家有島の関心――創作過程における想像力の振幅は、『宣言』との対偶関係で振れ動いていた時よりも、ここにきていっそう拡大増幅されていったと思われる。小坂晋氏は、『石にひしがれた雑草』と『生れ出づる悩み』を有島の〈精神的陰画〉と〈精神的陽画〉と形容しているが、[8]けだし適評であろう。また、その一方が〈人間が一生の間に恐らくは一度より経験しない尊い深い生命の燃焼を、一片の思ひやりもなく、ふざけ切った心で弄んだ[9]〉加藤に対しての、また一方が〈強健な意力と、強靱な感情と、自然に哺まれた叡知とを以て自然を端的に見ることの出来る〉木本に対しての、いずれも二人称の作品として書かれているという符合も偶然ではなかったはずである。その背後に、作者有島の切迫した自問自答を聞く思いがするのである。

『石にひしがれた雑草』は、同年4月の「太陽」に発表された。鑓田研一は発表当時の反響を、〈作者がジャーナリスチックな意味で人気の頂点に立つてゐた時分だけに、四方から囂々の声があがつ

た。中にはくさす者もないではなかつたが、大体は賞讃の方へ傾いた。〉と書いている。いまわかるところでは、菊池寛・近松秋江・長谷川誠也がそれぞれ異る立場からではあるが支持の意見、加能作次郎・西宮藤朝が批判的な見方であった。とくに、菊池寛が「帝国文学」に書いた評はすぐれたものとしてしばしば引用されている。

〈全体として、虚構（フイクション）だと思ふ。が大きな華やかな立派な虚構である。そして、全体で虚構であるに拘はらず部分々々は飽く迄、現実的（リアリスチック）である。そして全体が大きな心理的演習（サイコロジカルマヌーバー）である。人間の心理を解剖し、その真諦を摑んで、之を創作台上に置き之を駆使して、心行くばかりの心理的演習を行はしめた作品である。〉[10]

一方、批判的な見方としては、加能作次郎が「文章世界」に書いたものがすぐれている。加能は、M子と加藤の姦通の動機をM子の多姪な性情だけで片付けている点に難色を示し、〈其の肉的関係そのものが如何なる意味をもつか、人間生活にどんな力をもつか〉という点を掘り下げていけば〈彼等三人の人物の愛の性質や力や、性格上の相異や関係なども自然に分つて、あの作は一層のその広さと同時に深さを増し、一層ヒューメンな感じを与へただらうと思ふ。〉[11]と惜しんでいる。

翌大正8年には、福士幸次郎・宮島新三郎・増田篤夫・石坂養平による四編の有島武郎論があらわれた。いずれも、『石にひしがれた雑草』に対しては批判的な見方をしている。宮島は、〈あの主人公の愛の気持には可なりの遊戯分子といたづら的要素〉がはらまれているとし、それが〈愛と憎との争闘として与へる此の一篇の感銘〉を希薄にしたと書き、[12]増田は『宣言』の登場人物もこの作品の人物も〈エネルギイの傀儡である〉と断じ、〈氏の小説には、厳密に言ふと、心理がない。氏は生命を捉へんと焦慮して、生理を摑んだ。〉[13]と手きびしく非難した。石坂は、『カインの末裔』『迷路』に惹かれてたかまっていた有島への期待は『或る女』を読んで裏切られたとし、〈人生を熱愛するこころが機巧的に生きようとするこころに打負される〉作者の快楽主義的な傾向はすでに〈『石にひしがれた雑草』のM子を凝視する作者の態度に見えてゐ〉[14]た、と書いた。有島は、石坂の批判に私信を送って、〈私は自分の生の苦痛をあの作（注『或る女』）で叫んだのです。かう申せば「石にひしがれた雑草」のテーマも自ら御了解下さることゝ思ひます。〉[15]と反論した。この石坂養平の批判とそれに対する有島の反論とは、価値評価に正負の差こそあれ、ともにこの作品を『或る女』と結んでとらえ、二つの作品の近縁関係もしくは等質性を認めている点で注目に値するものと言えよう。

その後、二つの作品を結んでとらえた評家に本多秋五氏があり、その着眼は唐木順三・浅見淵氏[16]らの言及を経たのち、小坂晋氏によっていちじるしく深化発展させられた。氏は、この作品の構成と評

価をそれぞれ中心にして独立した作品論を二度にわたって書き、またその間に『或る女』と結んで主人公の精神構造を掘り下げた草見を発表している。その第一稿では、(1)『或る女』の習作、予備小説と見なしうるところから、『或る女のグリンプス』から『或る女』（とくに後編）への屈折過程を解く鍵になること、(2)有島のもっとも根深いところに潜む病理的な面が典型的に出ていること、(3)心理的密度の高い作品で、作者の創造力――心理作家としての力量をよく示していること、の三点をあげ、同じ素材を扱った宮原晃一郎の『韮露にかへて』との比較対照、同時代評の吟味、作品分析を展開している。また、第二稿では表題の〈石〉と〈雑草〉に仮託された寓意を追尋しつつ『或る女』のテーマとの相関関係を追求し、第三稿では『真珠夫人』『痴人の愛』『鍵』の諸作品との対比も試みている。作品分析にあたっては、有島が啓発されたというエリスの『性の心理学的研究』のヒステリーについての記述を紹介し、その学説とこの作品におけるM子の変化とが符合することを立証したうえで

〈作者がエリスを読み、葉子と倉地の仲を裂いて葉子を性飢餓から病理的ヒステリーで破滅させようと構想を練っていた時に白葉の復讐譚を聞き、この構想が閃いたので、作者は後篇の大骨だけを実験してみたわけである。〉

という仮説を提出している。『石にひしがれた雑草』の創作過程に関するこの仮説はきわめて魅力的である。有島の脳裡に多鶴子から葉子への成熟作用が伏流としてつづいていたこと、白葉の復讐譚に彼が興味をおぼえたことはいずれも事実である。また、『石にひしがれた雑草』が結果的に『或る女』後編の〈大骨〉を示す作品になったのも事実であって、その意味からすれば〈実験〉だったかも知れないとも思われる。しかし、この仮説にはいくらか性急な飛躍があるのではなかろうか。

ここで飛躍として気にかかるのは、作者が〈葉子を性飢餓から病理的ヒステリーで破滅させようと構想を練っていた時……〉という断定である。二年前に有島がエリスの著作を読んで、〈「ある女のグリンプス」の改作に有用な諸点を獲た。〉と感じたのは事実であり、『石にひしがれた雑草』の翌年5月に完成した『或る女』後編において葉子が〈性飢餓から病理的ヒステリーで破滅〉する道を歩んだことも事実であるけれども、なおそれは白葉の復讐譚を聞いた時の有島が葉子を〈破滅させようと構想を練っていた時〉であると断定する根拠としてはきめ手に欠けるように思われる。また、白葉から復讐譚を聞く→女性を破滅させる物語の構想が閃く→『或る女』後編骨格の実験、という直線的な継起展開は、さきに一部をあげた当時の日記・書簡の読後感ともしっくりしない。さらに、〈私は自分の生の苦痛をあの作で叫んだのです〉という作者と葉子との紐帯は

『石にひしがれた雑草』の場合にはM子とではなく、語り手（遺書の執筆者）であるAとの間に結ばれていたと見られる点も押さえておく必要があろう。

有島の日記・書簡の記述を中心に、『石にひしがれた雑草』の成熟していった過程を推測してみると、およそ次のようになるのではなかろうか。

①有島にとって、『或る女のグリンプス』を改稿し、その続編を書いて完成することは創作活動上の懸案であった。

②『暁闇』を脱稿し（大正6・12・14）、泡鳴への反論を書き終えて（12・17）一息いれ、出来あがった著作集第二輯「宣言」を親しい人たちに送った（12・19）彼には、次はいよいよ『或る女』だ、という意気込みがわいてきた。

③中村白葉から聞いた復讐譚は、『宣言』の内容を〈裏返し〉にしたような話で〈大変面白かった[22]〉。（12・21）

④新しい年を迎え、〈今年は「白樺」だけに発表する事に決心した[23]〉。（大正7・1・1）

⑤〈新年の作物に対する江湖の批評は既に落潮を示してゐる。〉――腰をすえて仕事をしなければだめだ。〈今年は一つ白樺で「或る女」の続篇を完成してしまはう。[24]〉（1・4）

⑥〈来月号の原稿はまだ不相変着手しない。しかし何かが醗酵してはゐる。[25]〉（1・14）この時点で、あの復讐譚が〈「宣言」を書いた時の心持をもう一度裏返して自分に迫〉る一つのモチーフとして育ちはじめていることがわかる。その着眼の背後に『或る女』後編についての追尋があったことはもちろんである。

⑦〈木田から……実におもしろい手紙が来た。前からあれを題材にして書きたいと思つてゐた所だから一つものにしようと思つてゐる。[26]〉（1・17）ここに来て、先の復讐譚は『生れ出づる悩み』という、『宣言』よりもいっそう明確・峻烈に対立するモチーフをえて深化し、虚構として定着する歩みをたどりはじめることになる。彼が中村白葉にその材料を〈懇望〉し〈譲つて〉もらった[27]のはその話を聞いた直後ではなく、おそらくこうした経過ののちだったろうと推測されるのである。

⑧〈白樺に精力を集めて「或女のグリムプス」を本年中に仕上げてしまひたいと思ってゐますが、甘く行けば仕合せです。[28]〉（1・22）

④から⑤へ、さらに⑧へと『或る女』完成への意欲は継承されているが、そのニュアンスは微妙に相違している。『或る女』完成を一途に目ざしていた年頭の決心が、おそらくはより着実な前進のために、⑧に至って一歩後退のおもむきを呈しているのである。こういう表現になったのは、この時点においてすでに、『石にひしがれた雑草』と『生れ出づる悩み』が『或る女』に先行すること

が自覚されていたためであろう。

⑨〈書かなくつちやいかん〳〵といふ気分の催促をひかへ〳〵てゐた結果漸く心に油が乗つて来ました。今朝から原稿紙に向つてゐます。[29]〉（2・27）　これが『石にひしがれた雑草』である。執筆期間は10日余りで3月12日に脱稿した。[30]途中、3月5日に一女性にあてて書いた書簡[31]には〈貞操〉という語が四回も用いられている。有島の書簡には他に例を見ないことで興味ふかい。

こうして、この作品は「太陽」4月号に発表され、その夏にさらに推敲を加えて『生れ出づる悩み』とあわせ、著作集第六輯として9月に刊行された。

本多秋五氏は、『或る女』について考察した一節に、〈古藤は、いつか葉子に、僕は世の中を sun-clear に見たい、と言ってゐる。あなたはなぜもつと sun-clear に暮らして行けないのか、ともいってゐる。「一番嫌ひだけれど、一番牽き附けられる」ものを、白日のもとに瞭然と眺めたい、といふところに有島のリアリズムの根本的性格があるといへる。[32]〉と書いている。氏がここで指摘した有島のリアリズムの眼は、『石にひしがれた雑草』の冒頭部分にその不気味な一瞥をのぞかせている。

〈何んにも目的がなくなつてしまふと、人間の姿といふものが可なり露骨に見え透くよ。悪魔の眼が冴えてゐるのも多分はその為めなのだらう。〉

この作品の主人公Aは、この眼で加藤を見、M子を追い、おのが振舞いの痕跡と行く末を見すえている。ここには〈愛が……不正当に取扱はれた場合〉何が起こるかという憎悪の世界の追求が〈悪魔の眼〉を通して執拗に見つめられている。〈目的がなくなつてしまった、復讐の目的はすでに存分に遂げたという態で事がらの顛末を振り返る形式で書かれているのだが、なおそこにくりひろげられる復讐の絵巻はすでに過去のものとなったはずのM子や加藤の行状をなまぐさくよみがえらせ、それを見すえる語り手に返り血をあびせてやまない。高橋春雄氏は、〈唯凝視してみるということのインタレストだけが作者の側にある。[33]〉ときめつけているが、主人公Aの眼は作者の一対の目である。有島もまたその地獄絵巻の中で、したたかにわが身をさいなんでいたのである。

Aを描き進めていった作者の脳裡には、同時に木本に語りかける『生れ出づる悩み』の〈私〉が共棲していた。

〈私は「生れ出づる悩み」に於て凡て、誕生を待つよき魂に対する謙遜な讃歌を唱へようとした。自然は大きな産辱だ。私はその産辱の一隅につつましく坐つて華やかな誕生を祝する歌手でありたい。[34]〉

一方を〈悪魔の眼〉とよぶなら、これは〈天使の眼〉とも言える

かもしれない。われひと共に暗闇に身を滅ぼしてゆくAの懊悩を追求した作者は、同時にともどもに太陽のもとに蘇生しようとねがう〈私〉の讃歌の歌い手でもあった。この二つのモチーフは、あたかも遁走曲における二つの主題のようにからみ合いながら増幅されていったのであった。つまり、『生れ出づる悩み』の構想の成熟が復讐譚への沈潜をいっそうはげしくうながし、その視力を透徹させることになっていった。相対立する二つのモチーフは、毒薬と解毒薬のように、日常性を二つの対極に切り裂きつつ深化していったのである。『カインの末裔』において虚構の方法を体得した有島のリアリズムは、こうしたジグザクの軌跡を体験することによって、瞳をこらして田鶴子の行く末と周辺を見すえ、それを葉子に変貌させる力量を身につけていった。しかし、『生れ出づる悩み』の〈みずからを向上的に組みなおしていく上昇意識〉[36]に支えられた〈天使の眼〉と、『石にひしがれた雑草』の向上性を一擲した〈悪魔の眼〉は、その創作主体において一元的に把握されている複眼の異る二つの視角でなければならない。その自律性を喪失したとき、リアリズムは亀裂し、際限もなく解体していくことになる。それが、この場合は二つの対立的な素材を得て平行してそれぞれを書き進めるという事情になったために、二つの〈眼〉はあからさまに分極化し、互いに補完しあう二つの作品を生み出す結果になった。この時彼は、危険な尾根の上に立っていたのである。小坂晋氏は、『石にひしがれた雑草』は『或る女』の〈前篇から後篇への屈折点、ターニングポイントとなった作品である。〉[37]と指摘しているが、同時にそれは結果として、作家有島の創作方法の屈折点となった作品であると見ることができよう。それは、復讐の執念に身を焼き、絶望の果てに哄笑する人物を作者がみずからの分身として描いたことにあったゆえではなく、作者のもう一つの醒めた眼がその作品自体を定立させるものとして機能せず、異る夢を他の作品に織りあげて補完充足しあう態になったことから来ている。思えば『迷路』の世界も〈どす黒い空虚〉のとば口に出てしまったのであったが、『石にひしがれた雑草』にはもはやあの〈静かに……静かに……〉というリフレインも聞かれない。ここに、〈主観的爆発〉[38]をそのまま奔放な形で作品化するという先例が開かれることになったのである。

注

① 『岩野泡鳴氏に』（Ⅴ・三〇六）

② 『四つの事』（Ⅴ・三〇二）

③ 小坂　晋『「石にひしがれた雑草」の問題点』（昭和41年5月「国語と国文学」）に引用された〈付記〉（大正7年4月）。

④ 広告文『生れ出づる悩み』（Ⅴ・三九三）

⑤ 日記〈一九一七年の覚え書〉第二項。（Ⅹ・四一八）

⑥ 足助素一あて書簡（Ⅷ・二八二）
⑦ 同・1月17日付（叢Ⅸ・五一三）
⑧ 小坂　晋『石にひしがれた雑草』（昭和47年11月　瀬沼茂樹・本多秋五編「有島武郎研究」右文書院）
⑨ 『石にひしがれた雑草』より。以下、作品からの引用は新潮社版「有島武郎全集」により、とくにことわらない。
⑩ 菊地　寛『四月の文壇に就ての雑感』（大正7年5月「帝国文学」）ただし、改版角川文庫「生まれ出づる悩み」（昭和44年5月）所収の〈同時代人の批評〉によった。
⑪ 加能作次郎『二三の作品について』（大正7年5月「文章世界」）
⑫ 宮島新三郎『有島武郎論』（大正8年3月「早稲田文学」）
⑬ 増田篤夫『有島武郎論』（同・10月「解放」）
⑭ 石坂養平『有島武郎論』（同・10月「帝国文学」）
⑮ 石坂養平あて書簡、大正8年10月19日付（Ⅷ・三七四）
⑯ 本多秋五『日本リアリズム最後の作家――有島武郎の文学』（昭和28年2月「文学」）、唐木順三『解説　石にひしがれた雑草』（昭和29年4月、現代日本文学全集21「有島武郎集」筑摩書房）、浅見淵『解説』（昭和31年6月、東方新書「石にひしがれた雑草」）
⑰ 前出③と同じ。
⑱ 小坂　晋『「石にひしがれた雑草」と「或る女」――主人公の精神構造と主題』（昭和41年5月「日本近代文学」）
⑲ 前出⑧と同じ。
⑳ 日記、大正5年3月28日（Ⅹ・二七四）
㉑ 前出⑮と同じ。
㉒ 日記、大正6年12月21日の項に、〈中村白葉と宮原も来る。十一時まで話す。大変面白かった〉とある。（Ⅹ・四五一）
㉓ 前出⑤と同じ。
㉔ 前出⑥と同じ。
㉕ 足助素一あて書簡、大正7年1月14日付（叢Ⅸ・五〇七）
㉖ 前出⑧と同じ。
㉗ 前出③と同じ。
㉘ 前出⑦と同じ。
㉙ 有島生馬夫妻あて書簡、大正7年2月27日付（叢Ⅸ・五三九）
㉚ 前出③の〈付記〉末尾に〈一九一八・三・一二〉とあるのによった。
㉛ 佐藤しげゐあて書簡、大正7年3月5日付（叢Ⅸ・五四二～三）
㉜ 前出⑯と同じ。

㉝ 高橋春雄『有島武郎ノート』（昭和28年6月「国文学研究」）
㉞ 前出④と同じ。
㉟ 紅野敏郎『作品鑑賞』（昭和44年5月、角川文庫「生れ出づる悩み」）
㊱ 前出③と同じ。
㊲ 坂本　浩『有島武郎論（下）』（昭和9年2月「国語と国文学」）

4　昂揚と降下、二つの主題の相乗

――『或る女』

有島は、大正7年に〈「或る女」の続篇を完成してしまはうと思つてゐ〉た。ところが『石にひしがれた雑草』と『生れ出づる悩み』が健康上の理由もあって思いがけない難産となり、けっきょくその年の夏までかかることになってしまった。

〈この夏中は著作集の整理をするのがせきの山でした。是れから読売新聞に旅行記を書きます。それがすむと京都同志社の講演の準備にかゝらねばなりません〉。[38]

つづいて、10月3日から7日まで、『死と其の前後』が芸術産によって初演された。彼はその準備段階で松井須磨子・島村抱月と親しくなり、上演に心を砕いている。10月18日から翌月20日までは、同志社での初めての講演を機会に、京都を中心にして大津・奈良・大阪・神戸をたずねて過ごしている。[39] 一カ月余りの旅行から帰ると疲労のうえにいろいろな〈雑用が待つてゐ〉たが、[40] 12月にはいってようやく懸案の『或る女のグリンプス』（以下『グリンプス』と略記）の補筆改稿に着手した。[41]

年が明けてからは、部分的に組版も進行していたようであるが、『或る女』前編（以下、前編と略記）を脱稿したのは2月25日のことであった。[42] その仕事の間に彼は、身辺雑記ふうの私小説『小さき影』を書き、また、〈出世作を出すまで〉という「新潮」誌の特集企画にこたえて『自己を描出したに外ならない「カインの末裔」』を寄せている。この自作解説は、その主人公が一見自分とかけはなれた存在であるかのようでも、つまるところ〈自己を書き現はしてゐるのだ〉、そこに〈人間の已むに已まれぬ生に対する執着の姿を見て貰ひたい〉と主張した周知の一文である。彼はここで、広岡仁右衛門とみずからの内的なかかわりについて述べているが、その執筆時期からみても、この主人公の背後に田鶴子の像が深く重なっていたであろうことは推測に難くない。

こうして、彼はおよそ三カ月を費して『グリンプス』を前編の形に補筆改稿したのであった。この改稿の問題については、これまでに佐竹籌彦・江頭太助・紅野敏郎・笹淵友一・山田昭夫・矢沢麗子・西垣勤・福田準之輔らの諸氏がそれぞれに比較検討をおこなって

いる。[43] わたくしもまた、全21章のうち15章について対校したことがあった。それを要約すれば、(1)視点が整理され、(2)ヒロインがゆたかに肉付けられ、(3)表現においていちじるしい進境があることは実証しうるが、もっとも早く試みられた佐竹氏の〈改作と云ふよりは増補と云ふ〉べきものだという見解が当を得ていると思われる。

前編が『グリンプス』の〈増補〉の域を出なかったのはなぜだろうか。それは、西垣勤氏が指摘しているように、『グリンプス』が〈事実の枠組みをそのまま利用し、その価値評価、つまりは葉子の評価を逆転しようとする意図〉に発した作品であったことに規制されていると思われる。作者がもし〈事実の枠組み〉をとりはらってしまったとすれば、こんどは〈改作〉の範囲をこえて、新作――まったく別の作品になっていったであろう。ここでは『グリンプス』そのものを再確認しておいて、『或る女』後編（以下、後編と略記）に照準を合わせ、その解明を通して大正8年に成立した『或る女』をとらえることにしたい。

日清戦争の従軍記者としてはなばなしくジャーナリズムに登場した青年（国木田独歩）と、周囲の反対を押切って結婚した女性（佐々城信子）が日ならずして離別し、彼女はみごもった子を里子に出してあらためてアメリカに渡っていた青年（森広）と結婚することになる。ところが、彼女は渡米の航海中にその船の事務長（武井勘三郎）と〈道ならぬ恋〉に陥ってそのまま帰国し、当時の新聞（「報知新聞」）にすっぱぬかれた――。[44] これは、20代前半の有島の身辺に起こったできごとである。『グリンプス』は、その〈事実の枠組み〉をかりて、30代なかばの彼がみずからの胸中に吹き荒れる衝動を仮託した作品であった。

この作品は、いちどそこで完結していた。「白樺」に連載していた『グリンプス』の内容がいよいよ田鶴子と倉地の〈道ならぬ〉関係にさしかかろうとしていた時期に、彼は弟生馬にこう書き送っていた。

〈「或女」につき多大の御同情多謝々々。よかれ悪かれ兎に角僕は終局迄行く積りに御座候。一冊としての出版は考へ物と存居候。あれはほんの筆ならしにて、僕はも少し自信あるものを提供し度しと存居候。[45]〉

やがて田鶴子は倉地との〈道ならぬ恋〉をまっとうし、一日千秋の思いで待ちこがれていた木村を置いたまま帰国することになる。木村は田鶴子に加えられてきた〈過去の凡ての咀呪〉の象徴として〈丑の刻詣りの藁人形〉にみたてられ、田鶴子は〈木村を払ひ捨てる事によって、蛇が殻を抜け出ると同じに自分の凡ての過去を葬〉ろうとする。それは、安永武人氏が指摘した通り、〈日本の社会に対する訣別でもあり、同時にこれから帰国してのちの戦いの宣言〉[46]にほ

かならなかったはずである。『グリンプス』は、木村との婚約というキリスト者社会への屈伏によって挫折状況にあった田鶴子が、倉地への愛によって回復の端緒を見いだし、それを宣言したところで終局したわけである。西垣勤氏も言う通り、〈中絶ではなく、そこで有島は一先ずの解放感を得て終った〉[47]のであった。

この主人公田鶴子に明治44～45年当時の有島の心情が深く刻まれていたのは氏の指摘の通りであろうし、その〈虚無的心情からの出発〉と〈謀反人の心〉になっての愛の成就という道行きが、実質において作者自身の文学における〈戦いの宣言〉――あるいは少くともその祈念をこめたものであったろうこともうなずかれる。野間宏氏は、〈（有島が）自分自身の偽善を見つめれば見つめるほど、彼女（信子）の姿は大きな、炎のなかの女性として彼の内に甦ってきたのである〉[48]と書いている。挫折から出発し、倉地との愛をとげて人間回復の端緒を見出した田鶴子が『グリンプス』の結末において木村を突き放したとき、その〈炎〉は一段と高く燃え上っていた。むろん、作者の眼はその〈炎〉の陰に不安の影がしのび寄るのも見落としてはいない。田鶴子は、〈凡ての咀呪〉に復讐しながらも勝利のかちどきをあげることができず、かえって〈凶夢〉におびえなければならない。それは、作者のリアルな現実認識から来たものであったはずである。ともあれ、そのとき田鶴子は倉地を支えとしてきびしい現実に謀反し、反俗の階段をのぼりつめていた。彼女はまた、若い肉体と美貌と、愛人と崇拝者と、したがってまた生活にと欠かぬ金づるをも含めて物心両面でその先の生活への大いなる可能性をもっていた。

『グリンプス』がなければ、『或る女』は成り立たなかったであろう。しかし『或る女』全編は『グリンプス』の〈増補〉ではないし〈改作〉でもない。両者の懸隔は、そのモチーフの質的な変貌からきている。『グリンプス』は、現実に謀反しつつなお現実の中に生きる足場を失っていないというきわどい均衡、その甘美な蜜月のうちに終わっていた。シャトルに停泊した船室で倉地の腕の中に眠った田鶴子は、横浜のある旅館の一室で葉子になって目をさます。彼女の横に〈材木のやうに感じなく熟睡して居た〉倉地は、やはり側に〈鼾も立てずに熟睡してゐ〉る。作者には6年間の歳月が流れ、二人の眠りのうちに、世界が変わる。

後編は、

〈何処かから菊の香が かすかに通つて来たやうに 思つて葉子は快い眠りから眼を覚ました。〉

と書き出されている。〈菊の香〉に目をさました葉子は、縮緬の夜具・秋の日のあたる障子・広い畳の間、天井の木目などにしだいに気付いていく。[49]いずれも船旅にはなく、また彼女が身をおくはずに

なっていたアメリカの生活にも想像されなかったものばかりである。それらはまぎれもなく日本のものであり、その中に身を横たえていることが彼女には〈珍らしい事のやうに快〉い。まもなく起きた倉地のことばから、彼女はその日が〈天長節なのを思ひ出〉す。

葉子の帰国第一日が天長節と設定されていることについて、江種満子氏は、作者の〈意識的な作為〉がそこに働いている、それは彼が〈前篇での葉子の自由であると同時に反社会的な行為を、日本の明治の社会の現実の中におろして試行し鍛練しなければ、真に新しい自由としての意義を持ち得ないと判断〉したからであろうと書いている。天長節が、〈天皇を頂点として強固に確立された明治三十年代の国家体制、およびその体制下での前近代的な家族制度や前近代的な一般の意識構造が現実を動かしている場〉[30]の象徴であることに比重をかけた読み方である。

田鶴子＝葉子のモデル佐々城信子が帰国したのは明治34年10月であった。[31]したがって、その朝を天長節とするのは虚構である。そこに作者の意図、少くとも何かの強調があるのは事実であろう。

〈さう云はれて見ると葉子は今日が天長節なのを思ひ出した。葉子の心はなほ〳〵寛濶になつた。……軒並みに掲げられた日章旗が、風のない空気の中に鮮やかに列んでゐた。〉

葉子は、菊の香にさそわれて〈快い眠りから眼を覚まし〉、その日が天長節だったことを知って〈なほ〳〵寛濶にな〉り、軒並みの日の丸を〈鮮やかに〉感じる。もちろん、作者の目は、その時の葉子の目に映らなかった〈日本の明治の社会の現実〉をみている。だから彼女のその体感が〈現実〉に対する認識の甘さからきた幻想にすぎなかったことはすぐ明らかにされる。しかし、ここでの天長節の設定は、〈天皇を頂点として強固に確立された明治三十年代の国家体制〉のただ中に葉子が引きすえられ、〈試行し鍛練〉される出発点の強調というよりも、作者の意識の中でもう少し一般化された〈日本の社会〉の現実がいまはじまるという一つのなかじきりとして設けられたものではなかろうか。重ねて言えば、それは、彼女がみずからの意志で〈訣別〉したはずの〈日本の社会〉――彼女を囲続していた過去の〈社会〉全体を提示するものであったと思われるのである。

〈葉子は長い航海の始終を一場の夢のやうに思ひやつた。その長旅の間に、自分の一身に起つた大きな変化も自分の事のやうではなかつた。〉

石丸晶子氏は、〈絵島丸の船上でいよいよ倉地との間に事件を出来した葉子が、遂に木村を捨てて倉地への愛にふみ切る次第が語られる一六章は……この小説の分水嶺〉[32]になっている、とみたてた。葉子はそこで〈別の世界〉の住人になったとするのである。安永武人

氏は、20章の木村を払い捨てる行為をもって〈日本の社会に対する訣別〉であるとしていた。いずれにしても、葉子はこの船旅の間に、後もどりできない――またはとりかえしのつかない〈大きな変化〉を経てきたのであって、もはやそれは〈一場の夢〉としてすませるものではなかった。親類の者たちが自分をどう思っているか、木村の友人である彼自身はこんどの行為をどう受けとっているだろうかと古藤に電話したところ、〈奥歯に物のはさまつたやうに重い言葉を聞いて彼女の気持ちは〈妙にこぢれ〉はじめる。その上、さらに追い討ちをかけるように不快なできごとが重なり、

〈。某大汽船会社船中の大怪事

事務長と婦人船客との道ならぬ恋―船客は木部孤笻の先妻〉

という四号活字のすっぱ抜き記事を見るにおよんで、彼女は〈あつと驚かされてしまつた〉。これが日本の現実であった。親類だけではない。にえきらない古藤どころではない、十重二十重に彼女をとりまく社会全体が葉子を敵にまわしていることに気づかせられたのである。

葉子には、みずからの意志によって〈日本の社会に対する訣別〉をあえてしたのだという自負があった。みずからの意志によって〈別の世界〉の住人になる道を選んだのだという誇りがあった。だから、天長節の朝、捨てたはずの日本の土地に目をさまして、長い船旅の間の〈変化〉を〈一場の夢のやう〉に思いなしたこと、その過程で天長節と知ったことを〈寛瀾〉に受けいれたことはすべてみずからの意志に属することであり、おおらかな度量のあらわれであると思い込んでいたのであった。面会を拒絶されたわけでもない古藤との電話によって、快かった気持ちが〈妙にこぢれてしまつた〉のも、その自負や誇りを傷つけられたところからきている。彼女は古藤との応答によって〈面とぶつかつた実際は、空想してゐたよりも重大である〉ことに気付くが、その彼女にしてなお「報正新報」のすっぱ抜きの晴天の霹靂であった。

衝撃をうけて宿の外に出た葉子は、無意識のうちに倉地がいるはずの税関波止場の入口にきてしまう。そこには若い監視員たちの目があった。

〈物好きなその人達は早くも新聞の記事を見て問題となつてゐる女が自分に違ひないと目星をつけてゐるのではあるまいかと葉子は何事につけても愚痴つぽくひけ目になる自分を見出した〉

江種満子氏は、〈ひけ目〉というのが後編での葉子の意識を特徴的に語る概念であると注目して、右の例のほか26・31・34の各章からその用例をあげている。氏はそれにもとづいて、前編で外部からの圧迫を〈屈辱！〉とはじきかえしていく能動的な気迫に満ちていた葉子が〈後篇最初の章からどこか陰性な、≪ひけ目≫を感じる〉形

で登場していると書いている。[33] ところで、そこにあげられている用例は、右の一例以外はすべて倉地に対する〈ひけ目〉――あるいはそのことからくる負い目であって、惚れた弱みととれなくもないが、この第一の、対社会の〈ひけ目〉の指摘は重要である。

新聞に〈道ならぬ恋〉をすっぱ抜かれた葉子がいま感じている〈ひけ目〉は、謀反人の誇りと無縁であるばかりかその対極としての〈反社会的行為〉についての罪の意識でもない。それは、罪でなく恥の意識である。世間に顔向けができない、ひとに会わせる顔がないという〈尋常の〉(『グリンプス』) 感覚である。そしてそれは〈尋常の〉ものであるだけに、ひととおりの強がりではじき返すことのできない強靱さを持っている。いまとなってもういちどアメリカにとって返すこと――〈日本の社会〉から脱出することは倉地との愛を捨てることであるから、彼女には金輪際できないことである。〈訣別〉したその社会に復帰することは、社会の方が認めてくれないから不可能である。とすれば、宿をかえ、宿から隠れ家に移る逃亡のほかに道はないではないか。日本に舞いもどった葉子と倉地が杉木立ちに囲まれた隠れ家に身をおかざるをえない必然はこうしてみごとに構成されている。ただ、作者はそのために、〈屈辱！〉という反逆の気迫を対社会の〈ひけ目〉――恥の意識に移調するという代償を支払わざるを得なかった。

こうして、葉子は絵島丸船中におけるそれと類似した〈密室状況〉[34]におかれることになった。〈知った人に遇ふのを極端に恐れ避けながら〉逃げるように横浜を発った葉子はひとまず〈屈強な避難場所〉として双鶴館に身を寄せ、ついで倉地と懇意なそこの内儀の紹介で芝に移る。芝の家はある豪商が妾のために建てたというもので、検分した倉地は〈杉林のために少し日当りはよくないが、当分の隠れ家としては屈強だ〉と折り紙をつけた。人目をしのんでわざと吹き降りの日を選んでそこに移った葉子は、人力車の幌の中で〈魂を締木にかけてその油でも搾りあげるやうな悶えの中に已む已まれぬ執着を見出して我れながら驚く〉のであった。彼女をつき動かしているこの〈執着〉が『カインの末裔』の仁右衛門とも共通する、作者自身のものであることはあらためてことわるまでもないであろう。あの衝動が〈尋常の〉感覚の締木にかかる凄絶な葛藤がこの隠れ家に展開されるのである。

芝に移って一週間ばかり後、気散じにもなろうかと幾十通とたまった郵便物を〈岩戸の隙から世の中を覗いて見る〉つもりで整理したところ、岡・古藤らの手紙に交って郵船会社からの免職の辞令が出て来た。葉子は、〈こんな恋の戯れの中から斯程な打撃を受け〉たことにあらためて驚き、このうえは〈もう日蔭の妾としてゞも囲い者としてゞもそれで十分に満足〉だと口走る。帰国してから、倉

地は妻子とも離別していた。動じない彼もさすがに、〈とう〳〵俺も埋れ木になってしまつた。これから地面の下で湿気を喰ひながら生きて行くより外にはない。〉と述懐する。葉子は〈唯このまゝで永遠は過ぎよかし。〉と念じるが、彼女の願いはいつの間にか〈生きようといふ事よりも死なうと云ふ事〉に変わっている。しかし、相念としての死は生と隣り合わせていても、耽溺から目ざめればやはり生きていくほかはない。

ところで、〈二人は霞を喰って生きる仙人のやうにしては生きてゐられないのだ〉。それにもかかわらず、後編の世界には生産がない。『カインの末裔』の仁右衛門は、農場を去ってゆくときには子どもも馬もうしなっていたが、作中にはいきいきした生産のよろこびの場面があった。むろん、ここで言おうとするのは、耕作や労働や金もうけなどの狭義の生産活動に限ってのことではない。生きるための、正面から自然や社会ときりむすぶ働きかけの総体としての生産の意味である。『石にひしがれた雑草』にも生産がない。その主人公はアメリカで〈あらん限りの商売上の経験を積〉み、〈四五ケ所の大製造会社と非常に有利な契約を取り結〉んで帰国し、M子と結婚してからも〈瞬く暇に……日本中に取引先を持つやうにな〉る。しかしその過程は本題である憎悪と復讐にいたるまでの単なる説明に終始していて、その資産はM子を精神的な癈疾者にするために〈悉く蕩尽し〉てしまう。仕事をなげ出し、スパイを雇い、加藤に意趣返しをしたい一念からAはその財産と信用を〈悉く〉復讐のためにつぎ込んでいった。浪費と蕩尽、壊滅への傾斜をなだれ落ちる目もくらむばかりの下降感が一種の動力源となって主人公を動かし、この作品の力感となっている。後編の葉子もまた同じである。木村を拒否することによって〈社会〉との和解の機会を捨て、隠れ家へ、〈密室〉へと世の中に背を向けるところからその生活は始まった。

〈自分の心で何もかも過去は一切焼き尽して見せる。木部もない、定子もない。まして木村もない。皆んな捨てる、皆んな忘れる。その代り倉地にも過去といふ過去を悉皆忘れさせずにおくものか。〉

葉子はそれを愛情の問題と考え、二人の結合をいっそうたしかにするためのせっぱつまった生き方であると信じていた。倉地は、〈過去といふ過去〉を捨てたばかりでなく、現在を捨て、未来をもうしなう〈極印付きの兇状持ち〉に転落していったし、彼女の方は異郷で悪戦苦闘している木村からなけなしの金を搾りとる〈つゝもたせ〉の所業をあえてすることになっていく。倉地が日本の海図を売るスパイになったこと、葉子が〈つゝもたせ〉の域に足を踏み入れたことは、ともに二人が〈日本の社会〉における恥辱のきわみに陥ったことを意味している。二人の位置は、〈ひけ目〉などですませ

る場所からすでにはるかに陥没してしまったのである。

葉子はまた、その肉体を〈蕩尽〉していく。明治34年の晩秋にはじまった帰国後の生活が正月を迎えるころには二人の間に穏やかな〈作為のない調和〉をときに見出しうるような落ち着きをかち得た反面、彼女の健康はにわかにそこなわれ、下腹部や腰に痛みをおぼえるようになる。2月にはいると倉地の様子も目に見えてすさみはじめ、たがいに肉体と精神の苦痛を忘れようとして〈眼もくらむ火酒を煽りつけるやう〉に情痴の世界に耽溺していく。

すでに石丸晶子氏の注目すべき言及があるが、[55] ただれるような歓楽に身を焼いた竹柴館の一夜が明けて、葉子が〈殺人者が兇行から眼覚めて行つた時のやうな底の知れない気味悪さ〉を感じながら白日のもとに海辺の光景をながめる場面は後編中の一つのエポックとなっている。葉子は、〈自然も人も昨日のまゝの営みをしてゐ〉ることに茫然とする。

〈葉子は不思議なものを見せつけられたやうに茫然として潮干潟の泥を見、鱗雲で飾られた青空を仰いだ。昨夜の事が真実ならこの景色は夢であらねばならぬ。この景色が真実なら昨夜の事は夢であらねばならぬ。二つが両立しよう筈はない。〉

社会から追いつめられ、肉体におとろえを感じはじめながらも、葉子の日常はある意味で〈隠れ家〉に保護されていた。その〈隠れ家〉は、ともすると彼女に〈別の世界〉に住んでいることを忘れさせる緩衝的な役割りを果たしていた。しかし、いま〈隠れ家〉の外に出て白日のもとに〈世の中〉を見た葉子は、〈この景色の何処に自分は身を措く事が出来よう〉とうずくまってしまう。「白樺」の初期に有島は書いていた。〈さりながら其の人が一寸でも他の道を顧みる時、其の人はロトの妻の如く塩の柱となつて仕舞ふ〉。彼はまた続けてこうも書いていた。〈さりながら又其の人が何処までも一つの道を進む時、其の人は人でなくなる。釈迦は如来になられた。清姫は蛇になつた。〉[56] もはやどこにも〈身を措く事が出来〉ないのは、葉子が〈世の中〉の〈人でなくな〉ってしまって、清姫のごとく〈蛇〉になっていたからである。彼女の前には〈懺悔の門の堅く閉された暗い道がたゞ一筋〉見やられるという。しかし、その閉された〈懺悔の門〉は葉子には無用のものになっていたはずである。さらに言えば、それを自分の手で閉ざし、それを後にして〈謀叛人〉の生き方に旅立ってきたのではなかったか。それが『グリンプス』を貫いて葉子を押し上げてきた反俗の姿であった。それをあらためて〈閉された〉ものと受動的に意識した彼女は、竹柴館の一夜が明けたいま、反俗の存在から落伍者へ、謀叛人から逃亡者への曲り角をいつの間にかまがってしまっていたことを思い知らなければならなかった。

それにしても、作者はこの光景のどこに身をおいているのであろうか。二元的な生活から蝉脱したいとねがい、一元の本能的生活をひたすら志向してきたことを思えば、当然、葉子の背後に、あるいはその中に身をおいているのでなければならない。葉子にそれを気付かせた彼は、むろんその痛みに身をよじらせていた。正宗白鳥氏は、〈氏は常人以上に地獄をも煉獄をも見て来た人なのだ。[37]〉と書き、伊藤整氏は〈作者はこの怒濤のやうな作品よりも遙かに激しく実在していたので、この作品にすら或るもどかしさを作者は覚えてゐたにちがひない。……私は次第にこの作品が解り、それに従つて次第に怖ろしくなつて来た。[38]〉と書いている。どちらも、とくにこの箇所について書かれたものではないが、その作者が〈地獄をも煉獄をも見て来た人〉だと言い、〈作品よりも遙かに激しく実在してゐた〉と言うのはこの場合もたがわず当たっており、茫然たる葉子の背に作者の慟哭を聞く思いがするのである。葉子はここで、捨ててきたはずの〈世の中〉をロトの妻のようにかえりみてしまった。捨ててきたもの、振り返ってはならないものを〈振り返つて〉しまったのである。このとき彼女は、〈蛇〉になった姿で〈塩の柱〉と化したのではないか。有島の骨肉の分身は、〈世の中〉からも忘我の世界からも――二重に疎外されたのである。二元の生活を克服しようと求めつづけた彼は、ここで痛酷な一元の反語に直面したと言うべきであろう。そのしたたかな幻滅が白日のもとに傷痕をさらしているように見える。

この無残な幻滅のあと、葉子の世界は目に見えて色あせ、退行現象を露呈しはじめる。小康を得たかにみえても、それはすぐ後にくる失意をいっそう深くするつかの間の休止譜にすぎない。肉体の痛苦が精神の錯乱を助長し、それが彼女とその周囲のわずかの人たちとの間に結ばれている関係を荒廃させていく。〈若さから置いて行かれる〉という寂しさがつのり、歓楽のあとにはかならず病理的な苦痛をともなうようになり、〈今は振り返つて見る過去にばかり眺められる歓楽の絶頂を幻影としてゞも現在に描かう〉とあせり、鎌倉で木部孤笻と再会するとあれほど忌み嫌ってきたその男と〈しんみりと一別以来の事などを語り合つて見たい気〉にもなる。夏のはじめには〈痛ましく痩せ細つた、眼ばかりどぎつい純然たるヒステリー症の女〉になり、幻聴や幻覚に悩みはじめる。そしてここで、にわかに古藤がクローズアップされる。

西垣勤氏は、古藤に注目して、〈（有島は）葉子の主観的真実に没入し生きるために、……道徳的にバランスを取っている。それは古藤という倫理的ポールを立てたことである。[39]〉と書いている。作者が、もう一人の分身である古藤を作中に設定したのは、二人の横浜行きから書き始めた『グリンプス』の影響、もしくは名残りであろう。

古藤は、有島武郎から早月田鶴子が産み落とされるための、いわばへその緒のようなものであつた、とわたくしには思われる。木村のもとへ嫁ぐことになった田鶴子に、〈どうか木村君で行きつまつて下さい〉と諫言する彼は、〈割合に直截な unconventional な人間でも、田鶴子の今立つて居る崖から先きには田鶴子の行くのを悪む心が明らかに見て居〉た男である。それは、彼女が〈訣別〉した〈日本の社会〉の、やはり片割れの一つにすぎぬ存在だったはずである。ところが、なぜか葉子は彼に対しては一目も二目も置いている。後編40章から41章にまたがる古藤の三度目の訪問などは、西垣氏も指摘しているように動機からして不自然である。かりにそれは葉子の関知しないことだとしても、〈つゝもたせ〉とも呼ぶならば呼べ。〈やつてやれ。さう葉子は決心〉していたのに、古藤から、木村から受けとる〈金が手を焼くやうに思ひはしませんか。〉と言われるとその言葉が〈妙に耳に残つ〉て離れないというのは思いがけないしおらしさである。それは、あの竹柴館の翌日の光景を見たことからの心境の変化だけからきていると言えるのだろうか。古藤は倉地とはげしく口論し、なだめにはいった彼女に、〈あなたは本当に自分を考へて見て、何処か間違つてゐると思つた事はありませんか〉、〈あなたが何処か不自然に見えていけない〉、〈自分の力だけの事、徳だけの事をして暮せさうなものだと僕自身は思ふんですがね〉などと長口舌をふるう。古藤のこの程度の論理は、かりにその誠実な生き方という裏付けがあるにしても、彼女をつき動かしてきた衝動や〈堕落した天使のやう〉な生き方の前には吹けば飛ぶほどの凡俗なものだと思われるのだが、彼女はひとかたならず動揺して〈今まで築いて来た生活が崩れてしまひさうな危惧をさへ感じ〉る。有島が作中に古藤を〈倫理的ポール〉として立て、内田を最後に導入することによって〈道徳的にバランスを取つている〉という見方の成立するゆえんであろう。これは、本能的生活——自己の欲求に忠実な一元の生き方を主張し、神不在の人生の可能性を求めて苦闘してきた作者の内面にあった、いかんともしがたいたじろぎの表われであると思われる。

貞世が腸チブスにかかって入院してから、葉子は不休の看護のために見るも無残に憔悴していく。後編について本多秋五氏の言う〈破滅に向かつて錐モミ状態で墜落して行く過程〉がここに典型的にあらわれている。彼女は疲労のためにその肉体を蝕まれながら、こうしている間にも倉地と愛子が自分の留守をよいことにして逢っているのではないかと案じ、それを知りながら岡が隠しているのではないかと疑い、いや岡と愛子が……と、精神的にも際限なくさいなまれてゆく。間断ない心身の呵責に葉子は完全にうちのめされ、やがて彼女自身も入院しなければならなくなる。それからはたえず

幻影や幻聴があらわれるようになり、幻影の果てに葉子は〈死〉を見た。古藤が届けてくれた花を看護婦が活けていた時のことである。

〈その時突然死が――死の問題でなく――死がはつきりと葉子の心に立ち現はれた。〉

その〈死〉が消えたあとには、〈一筋の透明な淋しさだけが秋の水のやうに〉流れ、彼女の心には〈冷やかな悔恨が泉のやうに湧き出し〉て、できるだけ〈生きてる中にそれを償つて置かなければならない〉と考える。葉子はここでふと内田の顔を思い出し、もう一度会いたい思いに駆られた。

山田昭夫氏は、最後の場面における古藤を〈内田への〝使者〟〉・〈霊的世界への〝使者〟〉にみたて、〈もしかしたら葉子が懺悔する人となるのは時間の問題であるかも知れぬ。[79]〉と書いている。その筆法をかりて言えば、後編における古藤の位置は、結果として内田からの使者、霊的世界からの使者だったと見えなくもない。もちろんそれは、かつて『グリンプス』を書きはじめたときに古藤を登場させた作者の意図とは無縁のことであり、後編執筆時期の作者が自覚的に意図したことでもない。有島が京都で『或る女』の大詰めを執筆していたころの足助素一宛書簡[80]から推測すると、この作品の結章は作者自身が予期せぬ〈あとがき〉をかかえ込んだものとも見なされる。山田氏はまた、〈葉子が人生の持ち時間の切れる直前に不思議な〝霊〟の眼覚めを経験していることを確認できる。[82]〉と書いている。わたくしも同感である。しかし、作中のキリスト者の目からは、心情における神への帰心と〈懺悔する〉行為の間には無限の隔りがあるのであろう。葉子がいかに〈内田の心の奥の奥に小さく潜んでゐる澄み透つた魂〉を見たとしても、彼女が神そのものに対して信仰を告白せぬ限り〈懺悔の門〉は開かれぬのであろう。葉子は信者としては復権できぬ。彼女は回心に胸を焼きながら遂に届かず、永劫の闇の中へ〈錐モミ状態で墜落〉しつづけていくほかないのである。そして、このなりゆきは、『迷路』の結末において、虚構の方法が作者の深層にあるものをゆり動かし、混沌たるまま引きずり出した〈どす黒い空虚〉と奇妙に対応し合っているのである。

『或る女』の主題について有島が語ったものとしては、広告文・黒沢艮平宛書簡・石坂養平宛書簡がしばしば引用されて、〈勝気な鋭敏な急進的な女性[83]〉〈女性が男性の奴隷であるといふ事実[84]〉をとりあげた社会的な小説だという性急な論議を展開する根拠にもなっていた。しかし、刊行直後の感慨はそれらとはかなりニュアンスの異なるものであった。彼は原久米太郎宛書簡の一節に、〈ある女に起つた悲しい運命の流れは相当書いた積りだ。[85]〉と書いている。これは、後編執筆直前の談話で〈日本に於ける覚醒期の初めに現はれた女で衝動は感じてゐながら、如何して動くかを知らず、男子と自分との

調和を知らないために、堕落し煩悶する悲劇的径路を書いて見ようとした〉[68]と語っていたことをも照応している。この〈堕落し煩悶する悲劇的径路〉〈悲しい運命の流れ〉というモチーフは、『グリンプス』の上昇的なそれとは明らかに変質している。後編では、『グリンプス』の〈闘い〉は放棄されたという印象を覆い難いのである。

それにもかかわらず、『或る女』全編が〈日本リアリズム最後の作家〉[69]を代表する作品であり、〈日本の長編小説のなかの中心的な作品の一つ〉[70]であり、〈自然主義と理想主義に分かれた日本の近代文学の再統一点である〉[71]とまで奨揚される実質を備えているのは何によるのだろうか。おそらくそれは作者が、挫折から出発した主人公を反俗の〈謀叛人〉に押し上げることによって獲得した『グリンプス』の位置のエネルギーとも言うべきものを、後編において雪崩のような〈運命の流れ〉――すなわち運動のエネルギーに転換することに成功した点にあるのであろう。『或る女』全編の読後感にはその両者が相乗的に機能しあう渾然たるものがたちこめている。このような全編の完成は、明治末年の有島になしえなかった事業であるとともに、大正8年の有島にももはや繰り返しては構築しえぬ、昂揚と降下をみごとに複合した希有の文学的世界の誕生であった。

『宣言』から出発し、〈とまれ私は一箇の人間でありたい。〉とつねに自己と社会に対して誠実であろうとした有島武郎は、またこうも書いている。

〈畏れる事なく醜にも邪にもぶつかって見よう。その底に何があるか。若しその底に何もなかったら人生の可能は否定されなければならない。私は無力ながら敢へてこの冒険を企てた。[72]〉

これが『或る女』について、ことに執筆後に書かれたものであることにわたくしはたじろがされる。あの荒涼とした光景の中では、もはや社会的な意味での〈人生の可能〉は否定され尽していたのではなかったか。とすれば、彼にとっての〈人生の可能〉とは、人が〈その血の一滴まで自己に誠実〉でありえたかどうかという主観の世界に収斂していかざるをえない。ここに、生命は永劫の闇の中に一閃の光芒を放って過ぎる一点であるという〈詩への逸脱〉の不気味なモチーフが重なってくる。

しかし、彼はなお社会的な平衡感覚というべきものをも放擲してはいなかった。

〈心の迷路を辿り辿って漸く築きあげたやうな人生観も、兎もすると自分の性格が崩して仕舞はうとする。是れから又新しい曙光を見るまでには一仕事だ。[73]〉

その後、次の長編小説『星座』が出るまで、彼には三年間の落潮がつづくことになる。『或る女』を書き終えたとき、有島には晩年が始まったのである。

注

㊳ 川浪道三あて書簡　大正7年8月17日付（叢Ⅸ・六一四）

㊴ 日記　大正7年10月19日～11月15日（Ⅹ・四四〇～七）による。

㊵ 原久米太郎あて書簡　同年11月26日付（Ⅷ・三二六）

㊶ ▼目下著作集の原稿整理中に御座候（12・5）。▼正月号の原稿は全部ことわった。而して著作集だけに全力を尽くす事にした（12・8）。▼今は唯第八輯の執筆に専心するだけになってゐます（12・10）。▼僕は今「或女」に没頭してゐる（12・11）。▼校正はそろ〳〵来出した（大正8・1・9）。順に、宮部・原・富沢・原・足助あて書簡より。

㊷ 木田金次郎あて書簡　大正8年2月25日付（Ⅷ・三四六）

㊸ ▼佐竹籌彦『有島武郎論序説――「或る女」研究』昭和11年2月「国語・国文」▼江頭太助『「或る女」研究の基本問題――「性の心理学的研究」の影響について』昭和34年3月「文学語学」▼紅野敏郎『或る女』昭和37年3月「現代日本文学講座」小説3（三省堂）▼笹淵友一『「或る女」の主題』昭和39年6月「東京女子大学比較文化研究所紀要」▼山田昭夫『或る女』昭和41年1月「近代作家叢書・有島武郎」明治書院▼矢沢麗子『注釈』昭和44年7月、改版角川文庫「或る女」▼西垣勤『「或る女」論』昭和46年6月「有島武郎論」有精堂▼福田準之輔『解説「或る女のグリンプス」の意義』昭和45年3月「復刻　有島武郎『或る女のグリンプス』」▼同「或る女のグリンプス」――その成立について』昭和47年11月「有島武郎研究」右文書院

㊹ 神崎　清『「或る女」有島武郎』（昭和31年2月「日本の名作その作者とモデル」社会思想研究会）。なお、佐々城信子・浦子を本格的にとりあげたものとして山田昭夫氏の『「或る女」のモデルたち』（昭和47年3月「藤女子大学　国文学雑誌」）があり、「報知新聞」の記事についてはその後鎌倉芳信氏の調査『「或る女」論』（昭和49年11月「日本文学」）がある。

㊺ 有島生馬あて書簡　明治45年5月22日付（Ⅷ・一三五）

㊻ 安永武人『「暗夜行路」と「或る女」』（昭和32年5月　日本文学協会編「日本文学講座」5　東大出版）

㊼ 西垣　勤『「或る女」補論』（昭和46年6月「有島武郎論」有精堂）

㊽ 野間　宏『有島武郎』（昭和33年11月「婦人公論」）

㊾ 渡辺凱一氏は、この書き出しについて〈それは同時に、前篇擱筆から五年後、ようやく続篇を書きはじめた有島自身の眼覚めの意味を含めた書き出しともわたしには思われる〉と書いている。（『「或る女」の主題と背景』昭和50年9月「関西文学」）

㊿ 江種満子『「或る女」後篇のノート』（昭和47年11月、注⑧と同じ）

(51) 注㊹と同じ。

(52) 石丸晶子『「或る女」論』（昭和48年7月「国語と国文学」）

(53) 注㊿と同じ。

(54) 注㊼と同じ。

(55) 注(52)と同じ。

(56) 『二つの道』（Ⅴ・一一五）

(57) 正宗白鳥『有島武郎の「或る女」』（昭和2年7月25日「読売新聞」）

(58) 伊藤　整『有島武郎』（昭和11年5月「新潮」）

(59) 西垣　勤『或る女」再論』（昭和46年6月、前出の注㊼と同じ。）

(60) 山田昭夫『有島武郎・姿勢と軌跡』（昭和48年9月、右文書院）

(61) 足助素一あて書簡　大正8年5月21日付（Ⅷ・三五五）

(62) 注(60)と同じ。

(63) 黒沢良平あて書簡　大正8年9月5日付（Ⅷ・三六七）

(64) 注(14)と同じ。

(65) 原久米太郎あて書簡　大正8年6月15日付（叢Ⅹ・七九〇）

(66) 談話筆記（大正8年3月3日「読売新聞」）ただし、山田氏の前掲書（注(60)）所引の文によった。

(67) 注(16)と同じ。

(68) 注㊽と同じ。

(69) 奥野健男『解説』（昭和36年10月、日本文学全集24「有島武郎集」）

(70) 『或る女』広告文（Ⅵ・九二）

(71) 足助素一あて書簡　大正8年6月17日付（Ⅷ・三五七）